

第三十三 雅言俗言

中 邨 秋 香

古來歌文に用ふる詞は雅言なるべし、俗言なるべからずといへるは、まことにさる事にて、誰も異論あるまじく覺ゆるを、ひとり其雅言といひ、俗言と稱するもの、解

釋を誤るこそあやしけれ、これいかで辯せざるを得む、そもく雅言とは風流文雅の言といふにはあらず、又古來歌文に用ひ來れる詞を限りていふにも非ず、雅は正雅の義にて、正しく訛らざるもの、安らかにて穩しきものあまねく通用するもの、即ち訓じてみやびといふみやびは宮振にて、帝京中正溫雅の言辭、全國に通じて行はるべき謂にして、要言すれば正しき詞といふことなり、俗言とは日用普通の言といふにはあらず、俗は鄙俗の義、即ち方言にして一般に通ぜざるもの、訛りて正しからぬもの、鄙しくてかたよれるもの、訓じてさとびとも、ひなびともいふ、さとびは里振ひなびは鄙振にて、一郷一里、或はある一部の間に行はる、詞全體に通じては行はれざる謂にして、要言すればかたよれる詞といふなり、

方言は更にもいはず、土地の訛音例へばひをしといひ、人をしと、火箸をし、ばしの類へをひといひ、思へばを思ひ、揃へばを揃ひ、ばの類ろをどといふ、六をどく、論をどんの類が如き、及びむげに野鄙なる詞、中人以上の口吻に上らざる物の類、皆是なり、

故に雅言は風流文雅の言、および古來歌文に用ひ來れる詞を包含するものなれど

も、日用普通の言辭中にも、亦固より雅言あり、これを要するに日用普通の言辭は、雅言と俗言とを以て組織せらるゝものにて、其俗言中には死したる雅言死したる雅言の事は後にいふべし、及び其轉訛せむものあり、これらの語、邊鄙の地には最も多し、

然るに雅言とは古來歌文に用ひ來れる言辭に限るものとし、俗言とは日用普通の言辭をいふものと思へるは大なる誤にして、歌文の道の衰弊實にこれに原かすはあらず、蓋し雅言と俗言との差別は、古よりしてあるものにて、古言は雅言にして、今言は俗言なりといふにはあらず、又新しき詞は俗言にして、古くなるに従ひて雅言となるといふにもあらず、かの土佐日記なる舵取が「みふねより仰たふなり朝北のいでこぬさきに綱手はやひけ」といへる詞、また枕草紙雪山の條にみえたるかたる尼常陸介が「うらやまし足もひかれずわたつみのいかなるあまにもの給ふらむ」とよめる歌の詞など、いづれか當時日用普通のものならざる、又今昔物語なる觀祝上人に贈りたる盜人の書翰、古今著聞集の蒔繪師の消息の如き、是また當時日用普通の口語を、その儘書きとりたるものならずや、これらいづれも普通語の雅言にして、

かの萬葉集なる東歌及び土佐日記なる船歌などにみえたる、ある一種の詞の如き俗言にはあらず、

これによりていへば、今日といへども、日用普通語中俗言即ちかたよれる詞の外は、ことごとく雅言にして歌文の詞となすべきは疑なき事といふべし、さるを雅言は古來歌文に用ひ來れる言辭に限るものとし、之によりて詠みつゝるに非ざれば、まことの歌文にあらずとし、また古言の用法に違へるはあるまじき事とし、

古言の用法とは例へばせめてといふ語、古くはせまりての意にて至極せる事にいふ、いとせめて戀しきときはの如し、さるを十あるもの、うち二三は残したしといふやうなる意のところにいへるは、後世の事にていかが、せめて涙にくもらずも、かなの類なりといひ、やさしははづかしきなり、よの中をうしとやさしとの如し、さるを華奢にしなやかなる意にいへるは、後の事にてあらぬ事なり、やさしき數に人やおもふとの類なりといへるが如し、

且字音の語の如きは歌には更なり、文にも先は用ふべからざるものとせしより、歌文ともにおのづから今日の情狀をば言ひあらはしがたきものとなりて、歌といへ

ば先は題詠によりて、概ね古人の口眞似をなし、文は大かた花鳥風月を弄する如き、無用文字の範圍に彷徨したりしよ、是まことに當然の勢にて、今日の情狀は今日の詞をもていひあらはさざれば盡すべきものならざればなり、さるに近來文にありては世間の必要に逼られ、且は有志の賛同によりて、漸く普通語をも嫌はず書きつづる事となり、謂ゆる經國文字といふべきものも稍みるべきさまに至りたれど、いまだ一概にはいひがたけれど、歌にありては猶依然として舊套を株守するこそ歎かはしけれ、

抑言辭は心に思ふ所をいひあらはす符號にして、心に思ふ所は世態に依り、事物に應じて起るものなれば、即ち符號の言辭も世態事物の有様に伴ひておのづから移りゆかざるを得ず、古にありて人の心もおほらかに、すべての事物いと簡素なりければ、詞の數も少くて事足れりしを、世の中漸く開け、事物と、のひゆくに従ひて、詞數も多からざるを得ずして、増もし、轉じもゆきけるなり、今先紀記にみえたる上代の歌をもて、萬葉の歌に比較せば、其の言辭果していかに、又萬葉の歌をもて、三代集の歌に比較せば、其言辭果していかに、三代集以下代々の撰集、及び私撰家集等をも

て新舊互に比較せば、その言辭果していかに、殊に奈良朝と平安朝との間、王朝末と鎌倉幕府との間の如き、其變化の最甚しきは誰も明らに之を認むるなるべし、是は風土文物の改るに本づき、一は世態風俗の變するに依れるにて、勢然らざるを得ざるに、いづるなり、況や明治今日の大御代の如きは内外すべての事、いづれか開闢未曾有の事ならざる、されば其變化の如きも、亦開闢未曾有の形をあらはすべきものなるに、ひとり歌に於ては依然として舊瀝に喲唱するものは、今日の歌風、これを維新前にくらべなば多少の變化はありぬべけれど、そは全く小節目にして、大體に於てはかはることなし、蓋し此雅俗言の解釋を誤るに依るにあらざるを得むや、かの景樹が「今そこに豆腐屋の聲聞ゆなりおさん出て呼べゆきすぎぬまに」といふ歌の如きは、全國通じて解し得ざるものあらざるべし、これ普通語中雅言をもて、よみたるものなればなり、かく言は、或はいはむ豆腐屋といひ、おさんといふ、いかで雅言といふを得べきと、然らず、豆腐屋、おさん、皆正しき名詞なり、山上憶良が「憶良らは今はまからむ」といひ、萬葉三定子后宮の「元輔の後」といはる、君しもや「枕草紙、五月の御さうしの條」とよみ給ひし、憶良、元輔と何か異なるところあらん、いかで雅言

ならずといふべき、これらの名稱は更にもいはず、日用普通の言語の内、俗言即ちかたよれる詞の外はことごとく雅言なり、歌詞なり、但し今日の普通語には字音の多くの多し、又洋語より成れるものも少からず、これらいかで雅言とし、歌詞とするを得むといふ者もあらむ、されと字音語といひ、洋語といひ、調だに整はむには歌詞となして何かあらむ、萬葉はじめ字音語及び印度語を歌によみ入たるもの枚舉にいとまあらざるをや、

今一二の例を挙げば、萬葉に「池上の力士、舞カも」法師らがひげのそりくひ云々、法師なからかむ「心をし無何有の郷におきたらは、藐姑射の山を」功に申さば五位のか、ぶり拾遺に「流俗の色にはあらず梅の花珍重すべきもの」とこそみれ、極樂はるけき程、蜻蛉日記に「桃の花すきものどもを西王の後のものにては平家物語忠度の歌に「柳の御所を春よりてみよ、續世繼に琳賢御覽を經つる瀧の白糸、辨内侍日記奉行の人の氣色をぞしる」の類、又印度語をよみたるは、萬葉に「婆羅門の作れる小田拾遺に「かひらゑに共に契りし」の類なり、

中古の末かたまでは、別に歌詞と普通語との差別はなかりしを、當時歌合の流行に

つれて問難攻撃の事おこり、これに伴ひて詞の詮議はじまり、同時に諸家の髓腦ものつぎ／＼いできて詞の詮議ます／＼厳しく、歌道門流に歸するに至りて詞の詮議はまよ／＼苛酷となり、終に一種固陋の弊風を成し、歌語普通語判然區別をなすに至れず、徳川氏の世古學起るに及び、大に従來の弊を矯正し、歌道漸く正に復せしかども、古學は即ち古學なれば、かの謂ゆる固陋の弊風をこそ打破りつれど、其説おのづから古言の一邊に止りたりき、

今や國文は既な普通科に立てられたり、さればその範圍と作用とは、極めて廣く寛かにして、社會一般をして歌に文に、思想の十分を自由に發露せしめむことを期せざるべからず、之を期せむには先古言と今言との差別を明かにし、古言をもて古學科に屬し、今言をもて普通科に屬せざるべからず、

そも／＼言辭の上に於て、古言と今言との差別ありて、歌文の體も亦この區別なきを得ず、古言とは古昔に行はれたる雅言、および俗言にして、今に行はれぬ、死せることばなり、この中には詞は同じくして用法ことなるものあり、(即ち前にあげたるせめて、や。さ。し。の類)今言とは古來の語なると否とを問はず、今日社會に行はる、雅言

俗言をいふ、即ち活ける詞なり、擬古體の歌文は其體の時代に應じ、其世の心詞をまねびてよみもしつゝりもし、又其力を示さむとはは歷代の古言を縦横に用ひて、今日の情狀を自由にいひまはすこともあるべしといへども、是皆古學家の古學家に對する所作にして、普通の人に對する事にはあらず、普通の人、即ち世間一般に對しては古學家と否とに論なく、必ず今言中の雅言につきて之をあらはさるべからず、必ず今言によらざるべからざるものは今言に非ざれば、今日の情狀を十分言ひあらはすを得ず、よし又たとひ古言をもてよく之をいひ述べたりとも、世間一般の人をして十分之を解せしむる事を得ざればなり、

古昔に行はれ、古歌古文にみえたる語にして、今の世に行はれず、今の世にはたらかず、今の世に用をなさざるものなれば死したる詞といへるなり、既に死してはたらかざる詞なるをもて、今の世にありては其意明かならず、其意明かならざれば、古歌古文を解しがたし、而して之を明らむるの學實に古學にあり、されど古言中ある一部に於ては普通科に於ても修めざるを得ざるものあり、さるは普通科として知らざるべからざる古歌古文の解釋に必要なればなり、

此普通科にて修むる一部の専門語によりて、死したる詞の復び蘇生し漸く普通の歌文に用ひらるゝものあり、例へば御稜威大御言の類なり、言辭は世態に依り事物に應じて轉輾おしうつり變化きはまりなきものなり、されば同一語にして古今意の異なるものあり、用法違へるあり、活用變するあり、言の略かるゝあり、添はるゝあり、是皆勢の自然にして、人爲の得て左右しがたきものなり、故に語格正しく語法亂れざるものゝ限は、之を雅言と稱し、歌に文にこれを用ひて可なり、

例へば古昔に在りてはながめといふ詞は長目にても思ふときおのづから物のうちまもらるゝにいひしを、今は眺望の事にいひ、鐘にはおといひてねとはいはざりしを今はおともいへどかねのねともいひ、又古くはこのゆゑに、さるゆゑにこれによりて、さるによりてといへりしを、今は單に故によりてなどいふ類なり、これら古學上擬古體の歌文には、必ず其世の用法にこそ従ふべけれど、さ

らぬ普通歌文には今日の用法に依るべきがごとし、
鈴屋翁の玉霞にいはれし説の如きはもとより大かた至當の論なれども、そは全く

古學上より示されしことにて、今日の如き普通のものに對して説かれしものにてはあらず、かくいはゞ野もせ庭もせのごとき、普通雅言には野面庭面の意に用ひて可なりや、受けり越えりの類また普通雅言といふべきかといふものもあらんか、これらいかでか雅言とはいふべき野もせ庭もせを野面庭面の意といはむには、翁のいはれし如く、の庭もまでは聞ゆべし、せの字のよしなきをいかにかせむ、又受けり越えりの類は四段活より一類形狀に活らく引けり言へりと同類としていへる事にや、さらば下二段の活は第二轉よりいづれもらるゝれと活くものとするなるべし、さらんには一音の活なる得獲寢經の類は得り獲り寢り經りといふべきか、余はいまださる詞を聞きしことあらず、これら語格正しきものといふべきか、語法亂れぬものといふべきか、いかで雅言といふを得む、之を要するに雅言をもて古來歌文にみえたる言詞に限るものとし、歌に詠するものをば歌詞と稱して、普通語と別つが如きは、歌道門流に歸したりし世の弊風を襲ふものにして、其以前に於ては曾てあるとなかりしこと前にいへるが如し、されば今日に於ては斷然此弊を驅逐し、普通雅言もて歌文ともによりみづる事となさざ

るべからず、見よかの新體歌の如き、現に今日の社會に洽く行はれ、しかも其作者概ね少年有爲の氣象に富むものにして、勢ほと／＼短歌長歌を壓倒せんとするさまなるをみよ、これ畢竟短歌長歌は城壁ありて容易に犯すべからず、さりとて事物に應じて動く所の感情は默止すべからざるにより、終に新體歌を借りて之を洩すにいつるなり、故に國文の隆盛を圖らむに此は先雅俗言の誤解より築立てられたる城壁を破毀し、短歌長歌に通じて、今言をもて自由にいひあらはすこと、かの新體歌と同じからん事となさるべからず、